

「ばらのまち福山」 の教育

福山市長 三好 章 氏



教育随想

岡崎市と福山市は、市制施行日が同年月日であることや、両市が歩んできた歴史が非常によく似ていることから、「自然を保護し、緑を守り、明るいまちづくりをめざして協力していこう」と市制施行五十五周年を記念して、一九七一年（昭和四十六年）十一月、親善都市になりました。

以来、岡崎市の桜まつり、本市のばら祭といった観光面での交流のほか、姉妹校である岡崎市の井田小学校と本市の鞆小学校の間での夏休みを利用した相互訪問など、さまざまな交流が続けてきました。

本市はこれまで「人間環境都市福山」を都市づくりの基本理念として、長期総合計画の中で、二十一世紀の個性豊かな

「ばらのまち福山」を担う、たくましい心豊かな子どもの健全育成をめざしてまいりました。

そして、学校教育では、子どもたちが総合的な学習の時間に「市の花『ばら』」をテーマに、地域の良さを発見し、愛着を感じるような学習を行ったり、市庁舎に、情報通信ネットワークサーバーを設置して、情報の共有化を図るとともに、すべての学校からインターネットを教育利用できるように情報教育等に力を注いでいます。

二十一世紀は、急速に変化する激動の時代になることが予想されますが、次代を担う子どもたちには、どんなに時代が変化しても、柔軟に対応できる自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などの「生きる力」を育んで



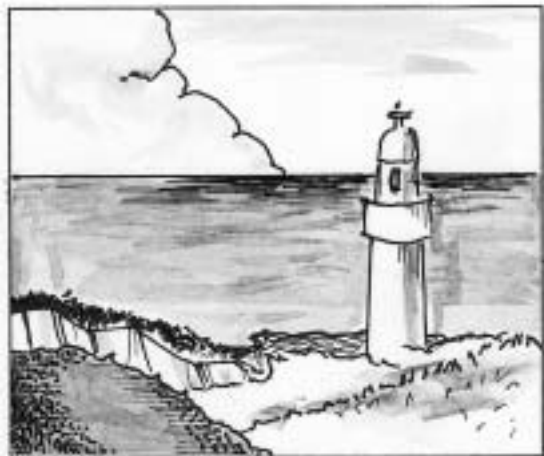
平成13年8月1日

8月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想	①
福山市長	三好 章氏	
この人に聞く	②
	清水 芳美氏	
羅針盤	②
社会科指導員	山田 一夫	
ふれあい	③
広幡小	岩瀬 裕美	
竜南中	小川 有理	
特集	④
	風化する戦争の傷跡	
お知らせ	⑥
フォト・ヒストリー	...	⑧
	組み立て体操（大正9年）	
この本を	⑧



いきたいと考えています。終わりにりましたが、市制八十五周年を迎えた両市の、今後ますますの発展と友好を祈念し、私の「教育随想」といたします。

（みよし あきら）

ふるさとシリーズ この人に聞く



伊良湖三河湾水先区水先人

清水 芳美 氏

世界各国から多くの大型船が出入りする伊良湖水道航路。漁船やレジャー船などで混雑する航路の中、大型船を安全に効率よく導くのが水先人、いわゆるパイロットと呼ばれる人たちである。この水先業務功勞により、春の叙勲で勲四等瑞宝章を受章された清水さんにお話を伺った。「大型船が日本に寄港する際、最初に会うのが我々パイロットなんです。技術のアドバイスも大切ですが、心と心が通じるようなあいさつやマナーを心がけています。」清水さんは商船学校を卒業後、航海士を経て、昭和四十三年船長に昇

進された。以来、訪れた国は五十四か国にのぼる。五十五歳の時に伊良湖三河湾水先人免状を取得し、パイロットとられた。

「猛勉強しましたよ。パイロットになるには、大型船の船長経験はもちろん、操縦や誘導の熟練した技術、白紙に正確な海図を描いたりできる豊富な知識などが必要ですからね。」

船の大きさや性能、船員の気質や熟練度を素早く把握し、複雑に変化する自然現象や港の特殊性を考慮し、船長に、速力や進路などの的確な指示を出す。水域全体の運航効率の向上と海難事故防止、ひいては環境保全のためにも、パイロットの果たす役割は大きい。

「パイロットボートで沖に出て、縄ばしごを頼りに船に乗り込みます。時化や霧、雪などで視界が悪いときは特に緊張する一瞬です。台風で大荒れの早朝、真つ暗やみの中で水浸しの甲板に上りました。その瞬間、船長が『伊良湖のパイロット、世界一』と握手を求めてきて感激しました。自分も船長時代、港でパイロットが乗船してくれると、まず一安心したものです。」

一か月に十数隻を誘導する。どの船を担当するかは三時間前にファックスや電話で決定される。知らせを

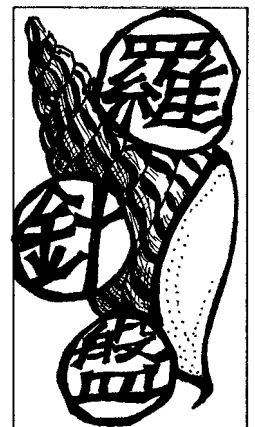
受けて自宅からすぐに港に出向く。遅刻は絶対に許されない。

「十五分前精神は、職業病みたいなものです。旅行に行つて自由行動になつても、集合時間に遅れたことは一度もないですね。」

パイロットとしての十八年間で、実に二千六百余隻の船を誘導した。「中部経済圏における外国貿易貨物の九割以上は伊良湖水道を通過します。ですから、世界貿易が無事に進むお手伝いをしているんだと自負しているんですよ。」

仕事に対する誇りやプロ意識、心のつながりを大切にする姿勢。世界を見てきた人の言葉から学ぶことは多い。

氏名 しみず よしみ
生年月日 昭和三年六月一日
住所 舞木町天神越五九一



情熱と工夫

社会科指導員
山田 一夫

「今日のスペシャルゲストに登場してもらいましょう」の声とともに鎌倉武士と元軍の兵士が教室に乱入してきた。驚きの表情が広がる。思わず身を乗り出す子供たち。目は軍装した二人の人物に釘付けとなった。

これは、A小学校で行われた「元寇」の授業での一コマである。

「二人の戦いの格好で違うところはどこですか」の問いかけに、勢いよく手があがる。伸びた指先に気迫を感じる。その子供たちの中に、B君の姿もあった。今まで授業に消極的であった彼が、一歩踏み出した瞬間である。工夫された導入が、彼を動かしたのである。

その後、話し合いの予先は日本軍と元軍の戦法に移った。

「元が攻めてきても、日本は高さ約三メートルの石垣をつくって守つ

水しぶきの中で

広幡小学校 岩瀬 裕美



「プールやだ。入りたくない。」
伏し目がちにA子が切り出した。
「どうして。一緒にやろうよ。」
「だって、わたし泳げないもん。太ってるし恥ずかしい。」
とつぶやいた。その後、わたしが何を言っても、彼女は水泳はいやだと言いつづけた。

A子はもともと学校を休みがちで、プールが始まればもっと欠席する日が増えるのではないかと心配していた。その不安は的中し、彼女は水泳がある日に学校を休み続けた。何度目かの水泳の授業がある日の朝、わたしは家まで彼女を迎えに行った。半ば無理やりだったが、一緒にプールに入り、そばで泳ぎ続けた。
「頑張れ。もう少し、もう少し。腕

を伸ばして。遠くの水をかいて。」と励まし続けると、驚いたことに最初はプールの半分までも泳げなかったA子が、その日のうちに、二十五メートルまで泳げるようになった。それから自信を持ったのか、水泳の授業がある日でも学校を休まないようになった。
「これからは学校を休まない。自分に負けない。」
と、二学期になって言った彼女の言葉が、今でも忘れられない。



必勝！ 竜南中

竜南中学校 小川 有理

「先輩たちが勝ち取ってきた旗を必ずまた持ち帰ってきます。」

総体前のハンドボール部キャプテンA子の宣言。新人戦・西三新人大会と、ライバル校に惜敗してきた悔しさを一気に吐き出す一言だった。
「二年生、ちゃんと声出して！」

A子の声がグラウンドに響く。のんびりしている二年生に、三年生が苛

立ちをあらわにする。
「三年が声を出さないから、後輩が動かないんだ。」

と監督であるわたしに叱られ、気まずいムードが漂う。二年生と三年生、監督と部員、キャプテンとしてその狭間に立たされ、A子の心労は大きいに違いない。でも、決してわたしに弱音を吐くことはなかった。

部活動は、一年生、二年生、三年生がそれぞれの立場でしっかりと役割を果たし、互いに支え合い、共に力を積み上げていく先に、大きな感動が待っている。総体では、激戦の末、優勝を勝ち取ることができた。

「仲間を信じてよかったと思えます。夏までにさらにパワーアップし、必ず完全優勝できるよう、自分たちの目標まで突っ走っていきます。」

A子の力強い言葉とともに、最後の夏が近づいてきた。



たからだいじょうぶ。」
「元は千人の兵を一つの集団にしていたので、石垣は乗り越えられると思う。」

自信に満ちた発言が続く。子供たちの調べは深く、説得力がある。

こうした意欲的な学びを支えている背景に、授業に対するC先生の情熱と工夫がある。

C先生は四月当初から次の二点を重視しながら授業に取り組んでいる。
・「縄文クッキー作り」「土器作り」
「火おこし」などの体験的な活動を積極的に取り入れる。

・視聴覚機器を効果的に活用する。
これ以外にも、「今日の人物」と名付けたスピーチの時間を設定したり、子供の手による『日刊人物新聞』を発行したりしながら、意識の持続化を図っている。また、子供たちに授業の評価をさせることで、常に実践を厳しく見つめ直している。

このような教師の姿勢が、ねばり強い追究や、足場のしっかりとした発言を生み出しているのである。

今日もC学級では、一回り成長したB君と、熱心な調べ学習をする子供たち、そして、アイデアあふれるC先生による楽しく活気のある授業が展開されていることであろう。



▲運動会での攻撃模擬演習（常磐小・昭和18年ころ）



▲奉安殿（矢作中・昭和3年）



風化する戦争の傷跡



戦災復興之碑
（籠田公園）

戦争は教育の世界に深く影を落とした。昭和十三年の「国家総動員法」に続き、昭和十六年には勅令による「国民学校令」が公布された。その内容は、国家主義的色彩が強く「皇国民の錬成」が教育の心髄とされていた。さらに、同年十二月、太平洋戦争に突入すると、いっそう軍国主義的な教育が表れた。

「当時は、奉安殿というのがどの学校にもあり、御真影（天皇の写真）が祀ってあった。この前では必ず、一礼をしてから通るようにと言われていた。」
『うめぞの風土記』より

さらに、日を追うごとに戦争は激化した。子供たちは、金属回収をしたり、運動場を畑に変えて食糧を確保したり、軍需工場で武器を製造したりするなど、勤労奉仕作業が日常とされた。

また、他地区から戦火を避けて、疎開してくる者もいた。

「名古屋の小学校から、五、六年の生徒二十名位が、担任の先生に連れられて、着替えと学用品を木のリング箱に入れて龍泉寺に疎開にきた。リング箱を机代わりにして、子供たちは本堂や庭で元気に過ごした。」
『六南八十年』より

そんな中、B29八十余機による岡崎空襲は、昭和二十年七月二十日未明に発生した。この空襲による死者は、二百七名を数えた。この数の中には、三十名の小中学生も含まれていた。さらに、羽根、連尺、男川など市内中心部の学校も、戦火を免れることができなかった。

「三年生の時、空襲により学校が焼けてしまいました。（中略）暗い中、友達と記念碑のところまで走っていき、『学校が燃えてしまう、燃えてしまふ』と足をがたがた震わせ泣きながら見ていました。」
『創立六十周年記念誌羽根』より



▲運動場の開墾（愛宕小・昭和17年）



▲金属回収（広幡小・昭和15年ころ）

▶墨塗りの教科書(矢作南小・昭和21年)



▶焼夷弾攻撃(名鉄男川駅周辺・昭和20年)
(中日新聞社提供)



▲学校の復興作業
(連尺小・昭和22年)



▲岡崎空襲の慰霊碑(松坂屋東北の角地)

それから約一か月後の八月十五日、天皇による玉音放送がラジオから流れ、全国民に大きな衝撃を与えた。同時に、学校教育も大きく転換した。奉安殿は取り壊され、戦争を教唆する教科書の表現は、墨で塗りつぶしたり、のりで張り付けたりした。また、昭和二十二年には、教育基本法及び学校教育法が公布され、現制度に刷新された。

そして、終戦から五十六年の時が流れた。わたしたちは多くの人々の平和を願う心と、復興へのためまぬ努力により、着実な発展を遂げ、豊かな生活を享受できるようになった。だが、残念ながら、当時の悲惨な事実、時代と共に次第に風化しつつある。

戦争で心に深い傷を刻み、今なお苦しんでいる人が多数存在している事実を、私たちは、決して忘れてはならないし、次の世代に確実に伝えていく使命がある。



▲全焼した男川国民学校(男川小・昭和20年)

お知らせ

●ハートピア岡崎だより

本年度から、臨床心理士の大津直樹先生が、毎週水曜日午前中、ハートピア岡崎に来られる。子供たちの学校復帰を援助していただくためである。

大津先生の、仕事を紹介する。

○ケース会議

ハートピア岡崎では、水曜日の朝の打合せ会を所内ケース会議とすることにした。

ハートピア岡崎に通い始めた子供の様子、間もなく学校復帰できそうな子供の様子などを報告して、先生の助言をいただいている。

また、ハートピア岡崎の適応指導のあり方についても感想をいただいている。



○保護者との面談

十時から十一時までは、通所生の保護者との面談にあてられている。全員の保護者について行っている。一巡したら、保護者の希望を優先しながら二巡目を行うことにしている。ハートピア岡崎の子供の生育歴や生活環境を知っていただくと共に、子供の育て方について助言をしていただくためである。

○指導員との面談

担当指導員との面談も行っている。その子供の指導・援助方針を検討してよりの確かな適応指導をするためである。

○子供の観察

大津先生は、子供と共に活動することを大事にして観察をされる。キャッチボールや卓球、調理に参加したりされ

る。子供たちは、こんな先生を「水曜日の先生」と呼んで、ハートピア岡崎の先生の一人に数えている。

●少年自然の家だより

○すぶちの自然紹介

秋の七草のうち、当地方に自生していないフジバカマを除く六種類を自然の家で見ることができるとりわけ、キヨウオヤオミナエシは、ほとんど自生を見ないという希少種であるが、東境界道や野外遊具場に生えている。

秋の七草というが、ナデシコは六月、ハギ、キキョウ、オミナエシは八月が花時で、二期期初めに七種類全部を集めるのは至難である。所内では、オミナエシの仲間で「オトコエシ」という白い花、アキノタムラソウの青紫の花なども観察できる。



▲オミナエシ

・「すぶちの森」はセミ時雨

五月上旬のハルゼミを皮切りに、七月上旬のニイニイゼミ、ほぼ同時期に山里の風物詩ヒグラシが鳴きはじめ、続いてアブラゼミ、クマゼミ、八月中旬にはツクツクボウシの声が聞こえる。当地は、その他に珍しいセミで、梅雨明けごろに「ヒメハルゼミ」が対岸の社叢で、八月下旬には西のヒノキ林で「ミンミンゼミ」の鳴き声が聞こえ、訪れる人から、「やはりここは山が深いですね」と言われる。

○キャンプ場だより

・生ゴミ0への取り組み

総合学習で、環境に関するテーマに取組む学校が増えてきた。一学期の利用で、「生ゴミを出さない」という中学校が二校ほどあった。炊飯活動で出た野菜クズも、持参した生ゴミボックスで持ち帰り、まさに生きた環境学習であると感心した。残念ながら子供たちの食べ残しの生ゴミはとても多い。適切な指導をしていただけたらと痛感する。

●教育研究所だより



▲電話の応対訓練

○初任者研修

接遇研修から学んだこと

福岡中 加藤 優子
接遇研修では、社会人としての基本的心得について実例をもとに学びました。礼の仕方、席次、来客への対応、電話での対応の仕方などについて多くのことを学びました。特に、茶菓の接待では、今までの自分の誤った作法に気づかされ、細やかな心遣いの大切さを知ることができました。今後、ここで学んだことが実践していけるようにがんばりたいと思います。

◆第十二回松下視聴覚教育研究賞

・理事長賞 城北中学校
「自ら学び主体的に生きる生徒の育成―情報と空間の相互共有による新しい授業形態を探る―」

◆第二十七回実践研究助成

・二年間の研究助成決定 矢作中学校
「総合的な学習と情報コミュニケーションの相互作用に関する実践計画―『生きる力』を育み、キャリア発達を援助するパソコンの活用―」

◆平成十三年度愛鳥週間野生物保護功労者
・文部科学大臣奨励賞 美合小学校

◆平成十二年度全日本学校関係緑化コンクール
・特選（文部科学大臣賞・日本放送協会会長賞） 緑丘小学校
学校環境緑化の部

◆平成十三年度緑化推進・動物愛護児童生徒作品展
・描画・ポスターの部 市長賞 矢作西小二年 都築 秀斗
山中小五年 池田 真季
竜海中三年 竹内 佐織

・習字の部 市長賞 矢作南小三年 太田 美伶
附属小四年 宇野 貴博

◆第45回岡崎市中学校総合体育大会の記録

●水泳競技の記録

☆新記録

性	種目	氏名	校名	記録
男子	100m自由形	安藤 貴洋	竜海	1'02"2
	100m背泳ぎ	佐々木 学	矢作	☆1'03"0
	100mバタフライ	荒井 俊介	竜海	1'06"1
	100m平泳ぎ	宇野 景太	甲山	1'16"2
	200m自由形	井土 清貴	附属	2'17"9
	200m個人メドレー	坂野 文哉	竜海	2'33"9
	50m自由形	河野 友徳	甲山	28"3
	400mメドレーリレー	佐々木・澤田・辻森・神谷	矢作	4'30"6
	400mリレー	野村・坂野・荒井・柳	竜海	4'03"5
	男子総合	1 竜海 2 矢作 3 甲山		
女子	100m自由形	中村 綾	矢作北	1'06"1
	100m背泳ぎ	前沼 利恵	美川	1'13"8
	100mバタフライ	橋本 恵	葵	1'11"1
	100m平泳ぎ	高田 知佳	竜海	1'22"7
	200m自由形	渡邊 夏子	竜海	2'28"8
	200m個人メドレー	近藤 美咲	甲山	2'40"9
	50m自由形	水上 さと子	附属	☆ 29"6
	400mメドレーリレー	大原・高田・鶴田・渡辺	竜海	5'08"6
	400mリレー	高田・齊藤・大原・渡辺	竜海	4'32"0
	女子総合	1 竜海 2 矢作北 3 城北		

◆愛知県中学生相撲大会

・団体戦 美川中学校
・個人戦 優勝 甲山中 河内 洋平
二位 美川中 加藤 愛貴
三位 附属中 野村 泰資

◆ペプシカップ第二十一回全日本バレーボール小学生大会

・愛知県大会 矢作北小学校
男子優勝 六ツ美南都ク
女子優勝 ラブ

◆親善訪問使節団派遣

岡崎市は、姉妹都市である、米・ニューポートビーチ市へ中学生親善訪問使節団を派遣して、今年で二十回目となる。結果が五月三十日に行われた。十月三日に出発し、現地の学校や市役所の訪問、ホームステイなどを通して交流を深める予定。

（生徒）甲山中 都築 範将
竜南中 太田 菜美
北中 井土民記臣
六北中 山本 梨愛
（団長）教育長 藤井 孝弘
（副団長）北中 太田 幹也

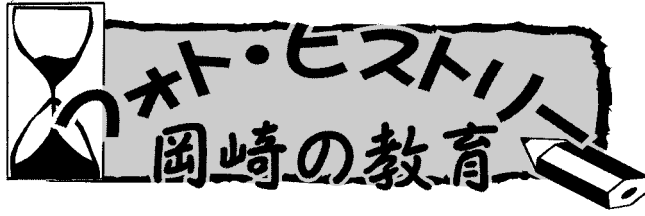
平成13年度夏期実技講習会

教科・領域	期日	会場	人数
国語（書写）	8.1	井田学区市民ホーム	50
社会	8.1	中部電力川越火力発電所	25
算数・数学	8.2	南中学校	50
理科	8.1	緑丘小・緑丘学区市民ホーム	50
生活	8.1	中部電力岡崎支店	40
音楽	8.1	太陽の城	30
図工・美術	7.30	おかざき世界子ども美術博物館	40
家庭（小）	8.2	六ツ美市民センター	20
技術・家庭（中）	8.2	愛産大三河中学校	50
英語	8.1	矢作市民センター	70
特殊教育	8.7	広幡小学校	40
視聴覚	8.2	福祉会館 6階	50
特別活動（野外活動）	7.25～27	岡崎市少年自然の家	50
情報教育	8.1	甲山中・城北中	70
学校図書館教育	8.1	教育研究所	60
学校保健	8.1	中央総合公園第一会議室	50
総合的な学習	8.1	広幡小・広幡学区市民ホーム	50



▲平成12年度 ニューポートビーチ親善訪問 なかよしの像の前にて

・カ
ツ
ト
南
中
中
根
勅
子



組み立て体操

(大正9年)

写真は、大正九年矢作中学校の前身、矢作第一尋常高等小学校における体育大会の一場面である。

運動場の周りには、演技を見守る多くの目。このころから組み立て体操は、男子の演技の花形種目であったことがうかがえる。

半ズボンに半袖シャツ、頭には学生帽子、はだし姿の子供たち。頭のとつぺんからつま先まで力のこもった演技である。どの子も正確な腕立ての姿勢を取っており、りりしい姿がさわやかである。

校舎は木造平屋瓦葺き。空には華やかな舞台を演出する万国旗。今と変わらぬ風景も展開している。



写真提供 矢作中学校

この本を

- *不揃いの木を組む 小川 三夫 ￥1500
草思社
- *子どもの脳が危ない 福島 章 ￥660
PHP新書
- *人は人によって輝く 三浦 綾子他 ￥1400
致知出版社
- *知の休日 五木 寛之 ￥640
集英社新書

*父のぬくもり 小淵 暁子 ￥952
扶桑社

「わたしは父の娘で本当に幸せでした。」の結びの一言。親子の情愛の極致を表現して余すところがない。

小淵恵三元首相の長女が語る、亡き父へのレクイエムとでもいえようか。淡々とした筆致から生まれる行間の余韻に、不思議な力強さを感じる。それは、メルヘンなどという淡いものではない。

わずか120ページほどの一冊だが、グラフィックデザイナーとして活躍する著者らしく、上品な装丁がさわやかな読後感を支えてくれている。

大型タンカーともなると、東京駅がすっぽり隠れる大きさ。時速二十キロのこの船を止めるには、十一キロの距離と五十五分の時間が必要と言った。

経験・技術・知識を総動員し、誇りを持って運航効率の向上に努める清水さん。教師の姿勢もかくありたい。

社会奉仕体験活動の充実などを柱とする教育改革関連三法が成立した。教育現場では、今後さらにボランティア活動や自然体験活動等の充実が求められる。

こうした活動に、子供たちが義務感からでなく、自ら取り組むことを願っている。

シオ スア

暑さをものともせず、照りつける太陽を全身で受け止める向日葵。校庭隅の花壇には、子供一人一人の思いのこもった大輪が、天に向かってたくましく伸びている。

子供たちが自らが挑戦し、21世紀を生きる力を培っていききたい。あの向日葵のように。

すいか割り、虫つかみに川遊び。昔から夏の遊びの定番であった。

最近ではあまり見られなくなったが、「生きる力」というのは、子供のころのこうした体験からつくられる。

夏休みは、家族でさまざまな体験活動ができる絶好の機会である。